

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531061

研究課題名(和文)感情的実践としての保育者の専門性に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Early Childhood Teachers' Professionalism as the Emotional Practice

研究代表者

中坪 史典(Nakatsubo, Fuminori)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10259715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：感情的実践としての保育者の専門性について、特に保育者が子どもの自律的問題解決を促すために自らの感情を意図的に抑制する場面に焦点を当てて検討した。具体的には、日本の保育実践の映像を用いて、日米の保育者にインタビューを実施した。結果は次の通りである。(1)自らの感情を意図的に抑制する保育者の実践は、子どもに介入しないけれども関与しないわけではない「非介入的関与」である。(2)自らの感情を抑制しながらも保育者は、視線や表情を媒介として自らの感情を表出しており、それによって子どもは安心感を得ることができる。(3)子どもの自律性を促すために保育者は、問題状況を共有しながらも自らの感情をあえて抑制する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the emotional practice of the early childhood teachers to promote the autonomous problem solving of the young children. To investigate this question, I conducted a Focus Group Interview with Japanese and US teachers using "video-cued multi-vocal ethnography." The results are as follows: (1) Japanese teachers' emotional practice is non-interventional involvement. An important aspect of this professionalism is to be involvement in children for sure without intervening them. (2) Japanese teachers would create an atmosphere by using their eyes, expression and so on. Teachers intend that this atmosphere would convey some their messages to children. For example, these messages mean "I am watching you" "I trust you" "Don't be worried." (3) Emotionally teachers would like to intervene children and teach what and how to do. However, teachers have to repress their feelings to control their desire to intervene directly in spite of feeling sympathy.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：保育者の専門性 感情的実践 感情表出 感情抑制 見守る 日本 アメリカ合衆国

1. 研究開始当初の背景

従来、保育者の専門性については、教授・指導の有効性を重視した技術的実践や、即興的判断と省察を重視した反省的実践などの視点から研究が進められてきた (Schon 1983; 佐藤 1997)。しかしながら、これらの研究は、保育者の専門性を技術的・合理主義的枠の中で捉え、研究者が可視化可能な対象を分析するとともに、保育者の言動の背後にある感情の側面については等閑視されてきた。

保育者の認知や行動は、感情と不可分に結び付いており (Hargreaves 1998) 教育的行為は、感情的実践でもあることが指摘されている (Denzin 1984)。特に保育の営みは、幼児の感情表現を手がかりに、保育者が受容・共感・同情など、自らの感情を表す行為であることから、感情的実践の側面を有している (秋田 2010)。

先行研究を概観するとき、小・中学校教師の感情的実践に関する研究は、体系的成果が示されており、教師の教授活動の本質が感情的要素を有することが指摘されている (木村, 2010)。保育者の研究においても、子どもへのケアや子どもとの相互作用の観点からその成果が示されており、感情の操作が保育者の仕事の中核部分であることが指摘されている (Taggart, 2011)。しかしながら、保育者の専門性を感情的実践の視点から捉え、感情の表出や抑制にはどのような実践的意義があるのかについては検討されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児との相互作用における保育者の言動を対象に、その背後に埋め込まれた感情的実践 (感情の表出や抑制) の具体的様相を探り出し、記述 (可視化) し、理論化することである。

3. 研究の方法

本研究では、研究方法として、Video-cued Multi-vocal Visual Ethnography (Tobin 1989) の手

法を援用することで、保育者と研究者の協働的実践研究を試みる。具体的には、幼児との相互作用における保育者の言動を映し出した映像クリップを作成・準備するとともに、その映像を多様な保育者 (a) 当事者、(b) 他園の保育者、(c) 海外の保育者など) とともに読み解くことで、背後に埋め込まれた感情的実践の具体的様相を探り出す。

4. 研究成果

< 研究成果 1 > 国内外の研究動向について、子どもとの関係、保護者との関係における保育者の感情的実践の側面からレビューすることで、理論的にアプローチした。その結果、次の点が明らかになった。

第一に、子どもとの関係に関して保育者は、例えば、笑顔とその他の表情を使い分けて 3 歳児集団の統制を試みたり、依頼、賞賛などのバリエーションを駆使して子どもとかわたりしており、これらは感情的実践の一端である。ケアリングや子どもとの相互作用における保育者の言動は、感情と不可分に結び付いている。

第二に、保護者との関係に関して、不安やネガティブな感情を伴う状況において保育者は、保護者に対して共感的感情を表出しており、こうした感情表出は、保護者とのパートナーシップの形成において重要な役割を果たしていた。また、保育者は、母親との関係構築のために自らの感情を管理するだけでなく、むしろ積極的意味合いのもとで、自らの感情を自律的に抑制したり表出したりすることで、母親を子育てにし向けようとしていた。こうした感情管理もまた、保育者の専門性としての感情的実践であると言える。

<研究成果2> 保育者の専門性としての感情的実践に関して、特に、保育者の感情の動きが顕著な場面として、子どもが自分で問題解決するために保育者がその場の状況を「見守る」場面が浮かび上がってきた。そこで、この「見守る」場面を対象に、保育者の感情の表出と抑制について検討した。具体的には、大阪・アトム共同保育所の映像について、(a)当事者(同保育所の保育者)(b)他園の保育者(日本国内)、(c)海外の保育者(米国マサチューセッツ州)とともに読み解くことで、背後に埋め込まれた感情的実践の具体的様相を探り出した。その結果、次の点が明らかにされた。

第一に、「見守る」保育における保育者の感情的実践とは、子どもに介入しないけれども関与しないわけではないことから「非介入的関与」と捉えることができる。従って、保育者の「介入的関与」「非関与」は、保育者の感情的実践とは言い難い。

第二に、「見守る」保育において保育者は、確かに可視的には子どもに介入しないけれども、子どもに対して視線や表情を媒介として、「見ているよ(注目・観察)」「だめだよ(指定・禁止・抑制)」「信じているよ(信頼)」「そうだよね(共感)」「大丈夫だよ(支持)」などの感情を表出しており、これらは保育者の感情的実践として捉えることができる。このことによって子どもは、「見てくれている感」「分かってくれている感」「信じてくれている感」「認められている感」などの安心感を得ることができる。

第三に、「見守る」保育において保育者は、子どもと問題状況を共有し、個々の子どもの気持ちに寄り添い、共感するにもかかわらず、そうした感情をあえて抑制したりすることから、感情的実践としての専門性を伴うものである。

第四に、米国マサチューセッツ州の保育者とともに大阪・アトム共同保育所の映像を読み解いたところ、こうした「見守る」保育における保育者の感情的実践は、必ずしも諸外国の実践において

みられるわけではなく、日本の文化的特性との関連が考えられることが明らかになった。

<研究成果3> 既述したように、保育者の専門性としての感情的実践を捉える上では、子どもが自分で問題解決するために保育者がその場の状況を「見守る」場面が有効であることが明らかになった。従って、この「見守る」場面に焦点を当てて、幼児との相互作用における保育者の言動を映し出した、別の映像クリップを準備することで、改めて保育者の感情の表出と抑制について検討した。具体的には、鳥取・森のようちえん・まるたんぼうの映像について、(a)当事者(同保育所の保育者)(b)他園の保育者(日本国内)、(c)海外の保育者(米国ロードアイランド州)とともに読み解くことで、背後に埋め込まれた感情的実践の具体的様相を探り出した。以上は、上記(2)に示した、子どもの行為を「見守る」とは何かについての仮説検証を目的に行ったものである。その結果、次の点が明らかにされた。

第一に、「見守る」保育における保育者の感情的実践とは、子どもに介入しないけれども関与しないわけではない「非介入的関与」であるという仮説がここでも検証された。

第二に、「見守る」保育において保育者は、子どもと問題状況を共有しながらも、自律的問題解決を促すためにポジショニングを整えていること、その過程で保育者は、自らの感情を抑制していることが明らかになった。

第三に、子どもの自律的問題解決が難しい場合、保育者は自らの感情を抑制しながらも、最小限の一時介入を試みる。この過程においても、感情の表出と抑制を伴う保育者の感情的実践を見ることができる。

第四に、保育者は個々の子どもの気持ちに寄り添い、共感するにもかかわらず、そうした感情をあえて抑制したりすることから、感情的実践としての専門性を伴うものであることが改めて確認された。

第五に、米国ロードアイランド州の保育者とともに鳥取・森のようちえん・まるたんぼの映像を読み解いたところ、やはりこうした「見守る」保育における保育者の感情的実践は、日本の文化的特性との関連が考えられることが明らかになった。具体的には、米国の保育者の場合、映像と築地の状況においては、子どもの行為に対する評価や動機付けを行うために、正負の感情を意図的に表出すると言う。このことより日本の保育者は、子どもの自律性を促すために、むしろ介入を控え、自らの感情を意図的・戦略的に抑制する傾向にあると言える。また、こうした子どもとの相互作用における保育者の感情の表出や抑制は、社会・文化的に構築されていることが明らかになった。

<研究成果4> 子どもとの相互作用における保育者の感情的実践は、洋の東西を問わず見られるものの、その特徴は日米で異なることが分かってきた。例えば、米国の保育者は、子どもの行為に対する評価や動機付けを行う際に、正負の感情を戦略的に表出する(Sutton et al. 2009)。他方、日本の保育者は、子どもが「先生に言われてできる」ではなく「言われなくてもできる」ことを重視するために、むしろ介入を控え、自らの感情を戦略的に抑制することがある(「見守る」保育)。感情表出が自明の米国の保育者にとって、日本の保育者が行う感情抑制は、行為自体が不可視であるため、専門性の欠如と捉えられることも少なくないと言う。

そこで、こうした異なる文化背景の比較を通して、日本の保育者の感情的実践の固有性を保育の専門性の視点から記述し、その意義を明らかにするために米国に赴いた。具体的には、大阪・アトム共同保育所、鳥取・森のようちえん・まるたんぼの映像を全米乳幼児教育学会(NAEYC: National Association for the Education of

Young Children)のシンポジウムにおいて提示し、参加した米国の保育者とともに読み解くことで、米国の保育者がけんか場面における、日本の保育者の非介入や感情抑制をどのように捉えるのかを探り出した。その結果、次の点が明らかにされた。

第一に、日米における保育者と子どもの関係性が異なること、その関係性によって、けんか場面における保育者の対応や役割も異なることが明らかになった。子どもとの相互作用において米国の保育者は、「指揮者の役割」(Creating, Leading, Adjusting, Time-keeping, Solving)を果たしており、その中でも、子どものけんか場面では、負の感情を戦略的に表出することで、Adjusting(軌道修正)とSolving(問題解決)の役割を果たす。他方、日本の保育者は、子どもと保育者を含めたネットワークをつなぐ役割を果たしており、子どものけんか場面において保育者は、むしろ介入を控え、自らの感情を戦略的に抑制することで、子どもと共同で問題を解決する役割を果たす。

第二に、米国の保育者が感情表出と介入によって怪我を未然に防ぐ理由には、米国の訴訟文化や、保護者の怪我に対する目が厳しいといった外からの規制がある。保育の規制についても州のガイドラインに従わなければならない。従って、米国の保育者は、感情表出と介入的教師役割を担うこととなる。他方、日本では、怪我に対しては、米国よりも許容する文化があり、保護者は子ども同士のけんかによって、怪我をするかもしれない(そして、けんかによって何かを学ぶだろう)と覚悟している。よって、軽い怪我をしても、保護者の目(外的規制)はそれほど厳しいものではない。そのため日本の保育者は、子どもがけんかを始めて

も、子どもから離れ、自らの感情を抑制し、すぐに身体的に介入できない空間にいることができる。

第三に、米国の子どもたちは、保育者が感情表出と介入によってけんかが解決されることを理解している。そのため、けんかが起きると保育者を頼るようになり、保育者中心で問題を解決する方法(スクリプト)を子どもたちも共有している(教師中心型問題解決スクリプト)。また保育者は、感情表出と介入を通して、個々の子どもが平等に扱われ、玩具などが順番に使えることを重視する。他方、日本の子どもたちは、けんかの解決は子どもと保育者の共同参加によって行われることを理解している。そのため、けんかが起きても保育者は、感情を抑制し、介入せず、共同で問題を解決する方法(スクリプト)を子どもたちも共有している(共同参加型問題解決スクリプト)。ここでは、子ども間で問題を解決する空間が与えられる。それにより、他児も動揺していることを知り、共に反省し、ゆずりあうことを学ぶ。子どもによって問題が解決された後に、保育者は、次の活動へと移ることとなる。

第四に、以上の知見から、日本と米国の保育におけるけんか場面での問題解決の方法が明らかになった。米国では、けんかによる身体的な怪我を未然に防ぐという明確な目標があり、保育者は負の感情を表出し、介入する。他方、日本では、けんかによる保育者の役割は多元的であり、自らの感情を抑制し、子ども同士での解決を期待しながら、問題解決という目標に時間をかけて向かう。米国の保育者は、日本のけんか場面における問題解決を見て、子ども同士でも解決できるという、子どもへの信頼を思い出していた。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1 . 中坪史典 2011 「保育者の専門性としての感情的実践に関する研究動向」

『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部(教育人間科学関連領域)』, 第60号, 241-248頁(単著)(査読無)

2 . 中坪史典・金子嘉秀・中西さやか・富田雅子2011「保育者のストラテジーとしての感情労働-幼稚園の3歳児クラスからの分析から-」『幼年教育研究年報』(広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設), 第33巻, 5-13頁(共著:筆頭著者)(査読無)

[学会発表](計8件)

1 . Fuminori Nakatsubo Harutomo Ueda Takako Yoshida and Kanako Tsyuchiya 21th Nov. 2013. “How Do You Intervene in Conflict Situation of Young Children?: Amazing Japanese Mimamoru Approach as the Teachers' Professionalism” NAEYC(National Association for the Education of Young Children) ANNUAL CONFERENCE and Expo (Washington, D.C., US)

2 . Harutomo Ueda and Fuminori Nakatsubo 29th Aug. 2013 “How do the Foreign Teachers Recognize the Japanese Mimamoru Approach?” 23th EECERA(European Early Childhood Education Research Association) ANNUAL CONFERENCE (Tallinn, EATONIA)

3 . Fuminori Nakatsubo 12th July. 2013 “Japanese Early Childhood Teachers Professionalism as Emotional Practitioner: Focus on the Japanese Mimamoru Approach” OMEP(World Organization for Early Childhood Education) XXVI World

Congress (Shanghai, China)

4 . Fuminori Nakatsubo Harutomo Ueda and Mariko Inoue 9th Nov. 2012 “How Do the US Teachers Recognize the Japanese Teachers' Professionalism?: Japanese Mimamoru Approach in Early Childhood Education and Care” NAEYC(National Association for the Education of Young Children) ANNUAL CONFERENCE and Expo (Georgia, US)

5 . Fuminori Nakatsubo, and Harutomo Ueda 1st Sep. 2012 “Why do Japanese Early Childhood Teachers Not Intervene for Young Children Even Though They Have the Educational Intention? -Theory and Practice of Japanese Mimamoru Approach-” 22th EECERA(European Early Childhood Education Research Association) ANNUAL CONFERENCE (Oporto, PORTUGAL)

6 . Fuminori Nakatsubo Harutomo Ueda, Takako Yoshida and Mariko Inoue 5th Nov. 2011 “Why do Japanese Early Childhood Teachers Lead or Intervene with Young Children Differently from American Teachers?: The Mimamoru Methodology and Professionalism in Early Childhood Education and Care in Japan” NAEYC(National Association for the Education of Young Children) ANNUAL CONFERENCE and Expo(FLORIDA, US)

7 . Fuminori Nakatsubo, Aki Ogawa and Kinu Suwa 1st Aug. 2011 “Emotional Labor as a Nursery School Teacher's Strategy Supporting a Highly-Educated Older Mother” 12th PECERA(Pacific Early Childhood Education Research Association) ANNUAL CONFERENCE (Kobe, Japan)

8 . 中坪史典・小川晶・諏訪きぬ 2011.8.21.

「高学歴・高齢出産の母親支援における保育士のストラテジーとしての感情労働」日本教育学会第 69 回大会（広島大学）

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/nakatsub/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

中坪 史典 (NAKATSUBO FUMINORI)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：10259715

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：